

寿ぎのドールハウス

——『齋宮良子内親王貝合日記』の表現——

亀田 夕佳

一、問題の所在

長暦四年（一〇四〇）五月五日、伊勢の齋宮では貝合が行われた。その様子は『齋宮良子内親王貝合日記』として詳しい。概略を述べておこう。

春に貝合の企画が立ち上がり、五月の庚申に行われることが決まると、老若男女全ての人々が自ら貝拾いに浦々に出た。当日の内親王のお姿がかわいらしいものであったことや、左方と右方に分かれた人々の衣装も都での歌合同様、方ごとに色目を揃えていたことが丁寧に記された後、左右の州浜の様子が細かく語られる。貝合としての決着は内親王に委ねられたが、にっこりとなさっておられたとされ、勝負のゆくえが知りたいと思ううちに夜明けを迎えたという内容である。構成としては、冒頭に仮名日記を据え、続けて四十首の和歌が配される形となっている。

本作品は『甘巻本歌合』の巻八に収められている。この歌合の発見を報告した萩谷朴氏は「甘巻本の此の貝合の記録は、此の時の物として唯一の伝本たるのみならず、実に貝合という行事の最

古唯一の具体的資料であって、現在迄堤中納言物語中の貝合の一節に纔かにその片貌を窺い得るに過ぎずかの伊勢貞丈すらも貞丈雑記の所説に於いて誤って貝覆と混同せるほどであった貝合なる物の次第を此の本の有する詳細な仮名日記の記述と貝合に出て来る耳新しい貝の名や数々の洲濱に凝らした趣向等に由って一千年の後に髣髴することを得るのは非常な喜びとせねばなるまい¹⁾と述べている。

また、『甘巻本歌合』を調査し、『纂輯類聚歌合とその研究』をまとめ上げた翌年に戦死した堀部正二氏は「実に貝合についての唯一の具体的な記録として和歌史・風俗史的に珍重すべきものである²⁾」とされている。

久徳高文氏は、この貝合が行われた十五年後の天喜三年に賀茂齋院で行われた「物語歌合」と対照させ、貝や物語といった題材を「合わせ」たことについて、「女性らしい優雅な選定であり、片や海の国伊勢齋王宮を舞台とする行事にふさわしく、片や平安都城の一角に位置する賀茂齋院の面目躍如たるものがある³⁾」とし、共に後朱雀天皇を父とする異母姉妹がそれぞれに文化的行事に携

わつたものだと述べたうえで、特に齋宮での行事について「伊勢文化の独自性を、平安京文化に對してささやかながらも主張しようとする意欲に満ちている。」と結論づけられた。

本橋裕美氏は、『躬恒集』において躬恒が「長浜」や「浮島」といった伊勢の名所歌を奉っていることから、「齋宮の徒然を慰める文学サロンが、都との深い交流の中で作られていたことがわかる。」と指摘したうえで、本貝合における歌題について「齋宮の土地意識を形成するために、都人にも知られた歌枕が選ばれていく点は興味深い」とされる。またこうしたサロン形成が父後朱雀天皇、母禰子内親王にとって政治的な意味を持ちうるものである点に言及し、『堤中納言物語』「貝合」への関わりを説いておられる。⁴⁾

先学の研究によって、「齋宮貝合日記」の概要と文学史的位置づけは、着実に明らかにされてきているが、個々の表現については、まだ検討すべき課題があるように思う。本論では、表現の質に即して考えてみたい。本作品には「貝合」という盛儀を語るにふさわしく、華やかな「寿ぎ」の表現が見られるが、その表現の内実を問いたいと思う。

二、「寿ぎ」の表現（一）——神仙世界——

この作品は、齋宮良子内親王に向けられた「寿ぎ」に彩られている点に特長があり、そのことは「神仙世界」との関わりや「貝／かひ」の詠みぶりや「人々」の取り上げられ方に認めることができる。まずは日記の冒頭から確認してゆこう。

日記の冒頭は、所在ない春の日々に人々が貝を拾いに行き、その貝を齋宮に奉ったところ、「貝合」が催されることになったところ

から始められる。以下示す。⁵⁾

春のつれづれは京にてだに海人のしわざゆかしがりし人々なれば、浦々に出でて貝を拾ひつつ持て参り集まるを、御前にはよに知らずをかきものに選りあそばせたまふを、同じくは貝合をしてめづらしからん一つにても持て参りたらむを勝にせむなどいひて、男女方分きて五月五日庚申に持て参らんと定めさせたために、所がらあやしき人々の心のうちにすさまじう思ふべかれど、さすがに我も劣らじと浦々に漁りをし、男女老いたる若き出でて教を選りまさむと挑みかはして、御前には二見の浦移したらん心地して、色々様々の貝散り敷きたるはこよなきつれづれの慰めにて、三四月も過ぎぬ。

「京にてだに海人のしわざゆかしがりし人々」とは、都から齋宮良子内親王に付き従ってきた女房であろう。都にいて実際に浜辺など見たこともない人々であったが、伊勢齋宮では、「海人のしわざ」の貝拾いを行い、良子内親王に奉ると、「よにしらずをかききもの」として「選りあそばせたまふ」という反応で、集められた貝を楽しんで御覧になったとされている。その内親王の反応を見て、どうせなら「貝合」を行って、一番素敵な貝を決めましようというイベントが企画されるのである。「所がらあやしき」というのは都に対する謙遜だろうか、その後用意される州浜の様子などからは、並々ならぬ自信が選ばせた表現だともいえよう。

冒頭に示されるのは、齋宮良子内親王の興味に沿ったところで「つれづれ」を慰めるために貝合が行われるに至った事情と、それ

を「男女老いたる若き」とあるように、仕える人々が「丸」となつてイベントを成功させるべく貝集めを行ったということである。

集められた貝の数々は「州浜」に仕立てられて、斎宮のもとに届けられた。右に続く日記部分では、それが心尽くしの「寿ぎ」の意匠であつたことが語られている。続けて示す。

右、櫛の箱と思しき一よろひに絵かきて、懸籠の上にかねの海して、蓬萊の山を作りて、童男叩女の舟を浮けたり、側の方に長浜を作りて、懸籠の方には本文かたを彫りて、の貝を入れたり、いま一つもかねの同じ海二見の浦しろらの浜に舟人行きちがひたるをおろし、下も同じさまにて色々の貝を入れたり、一つは参らせたる州浜の内に、山のあなたうらは小浜に波の荒く寄りたり、こなたうらには人々多く群れて貝を手ごとに拾ひたり。又ある州浜には葦原に鶴を据えたるを台にて、上に羅張りたるを敷き一よろひには、箱の羅、海にて錦と見ゆ、いま一つには藤かかりたる藤かたなり、州浜の上に貝どもあり。

左、大きな蛤のふたおほひなるを作りてあけたれば、きららを海にて彩りて上に波の文を敷きたる、まことにの海の心ちしてかけみたり、中は遙々とする海にて、めぐりを長浜しろらの浜にて、下を彫りて色々の貝を入れたり、箱の上の州浜もやがてその内々貝を入れたり、浦々磯々の潜きし網引き楫人舟人行きちがひたる、同じさまなれば、詳しく書かず、その心同じう見えぬべし。又かはりの扇のかたをして、その扇の絵に二見の浦のかたをゑりて、その心に同じ色の貝を

入れたり、こなたかなたに様々の州浜多かれど、一つ様どもなり、右大蛤の内に多くの浦々こもりたれば、書かず。

日記部分には、献上された数多くの州浜について、右方、左方の順にどのような細工であるかが記してある。両者に共通しているのは伊勢の海を模している点だ。右は「二見の海しろらの浜」、「小浜」、左も「長浜しろらの浜」、「二見の浦」として、斎宮の地元の海辺の景を州浜に仕立てている。後に述べるが、日記に続く和歌においても取り上げられる地名は斎宮周辺の伊勢の地域に限定されており、先に掲げた本橋氏の「斎宮の土地意識を形成するため」という指摘は首肯すべきとわかる。留意したいのは、ここに「蓬萊山」や「葦原の鶴」といった神仙世界が持ち込まれている点である。

左方の飾りつけに「蓬萊の山を作りて、童男叩女の舟を浮けたり」「葦原に鶴を据えたる」とあることから、用意された州浜が不老不死を叶える仙境を踏まえた造りであることがわかる。⁽⁶⁾いうまでもないが、「蓬萊山」は仙人が住むとされる場所であり、「鶴」は仙人の乗り物だとされる瑞鳥である。後の和歌部分においては次のように詠まれている。

蓬萊の山

はるかなる君が御代にや亀山の尽きせぬこふのほども
知られむ

長浜

君が代の例と見ゆる長浜にちくさの貝の数も知られず

あしはらに鶴たてる中にうらうつせ貝拾ふ

たづさわぐあしのなしはをかき分けてうらうつ貝を

あさりつるかな

(九)

和歌の冒頭二首は、不老長寿を叶える「蓬莱山」から「はるかなる君が御代」を導き、そこから「君が代の例と見ゆる長浜」という現実の景へと連続させることによって、斎宮良子内親王の暮らす伊勢の地を寿ぐ表現となっていると考えられる。

もっとも「蓬莱山」や「鶴」が、寿ぎの意を表すために州浜の飾りつけに一般的に用いられるものであることは、『うつは物語』「国譲中」巻には藤壺腹の第三皇子誕生の産養の場面にも「大いなる海形をして、蓬莱の山の下亀の腹には、香ぐはしき裏衣を入れたり。〈中略〉大きき例の鶴のほどにて、白銀を腹ふくらに鑄させたり。③、一五六頁」という祝いの品として贈られたことからも知ることができる。この貝合日記において興味深いのは、「蓬莱山」と「童男叩女の舟」が一所に作りこまれている点である。

「童男叩女の舟」は『白氏文集』「新楽府」の「海漫漫 風浩浩 眼穿不見蓬莱島 不見蓬莱不敢帰 童男叩女舟中老 徐福文成多証誕」を踏まえた表現だが、この詩は不老長寿を冀った徐福が、「童男叩女」とともに蓬莱山を目指して大海原に出発したものの、「眼穿不見蓬莱島」とあるように、ついに辿り着けなかったという内容となっている。つまり「童男叩女」は、本来、海洋をあてどなく漂い目的地にたどり着くことのできない存在であった。しかし、この貝合の場では、州浜の上に蓬莱山とともに置かれることによって、漢詩世界では叶わなかった結末を物語っているのでは

ないだろうか。⁽⁷⁾『白氏文集』の世界に拠りながら、それを反転させることにより、斎宮の浜辺を特別の場所だと強調して語っている趣向なのではないよう。

この催しが「寿ぎ」を主眼とすることをいう証左として「神仙世界」がどのように取りこまれているかを述べて来た。続けて「貝／かひ」の詠まれ方について考察してゆく。

三、寿ぎの表現(二)——「貝／かひ」の詠みぶり——

「貝合」というだけに、この作品には多くの種類の貝が取り上げられている。萩谷朴氏は「貝類に対する命名が詳密である」と述べ、「伊勢海及び紀州の海岸に棲息し得るものばかりである」とした上で「地誌的興味を抱かせる」特性を指摘しておられる⁽⁸⁾。

貝の種類については、次のように、歌題と和歌の両方ともに示される。

歌題…舟貝、梅の花貝、撫子貝、うら渦貝、都貝、玉貝、袖貝、蟬貝、鳥の子貝、紐貝、鮑貝、蛤、駒の脚貝、かた分け貝

和歌…ちくさの貝、紫の貝、白貝、舟貝、梅の花貝、撫子貝、うら渦貝、都貝、玉貝、蟬の羽貝、鳥の子貝、下紐貝、蟬貝、花貝、板屋貝、玉貝、紐貝、袖貝、駒の脚貝、かた分け貝

華やかな名称から鮮やかな色彩が想像できる貝の種類である。このように数多くの貝を集結させたとともに、斎宮近辺の海がいかに豊かであるかが示されるだろう。そして同時に、何とかしてこの行事を充実したものにしようという人々々の意気込みを見るこ

とができるようにも思う。本論では、まずはその詠みぶりに注目したい。「何が」詠まれたのかも重要だが、加えて「どのように」詠まれたのかを考えてみたいのである。

この貝合において、「貝」がどのように捉えられているのかを見てゆくと、「寄せくる」や「拾ふ」ものとされていることに気づく。以下、具体例に即して確認しゆこう。⁽⁹⁾

まず、「貝」を「寄る・来る・吹く」と関わせているものは、次に示す六首みられた。

藤かた

a、紫の貝寄る浦の藤かたは波のかかるぞ花と見えける (三三)

小浜

b、音高く小浜の波ぞ聞こゆる貝うち寄する風は吹くらし (四五)

舟貝

c、漕ぐ人もなぎさに寄する舟貝は吹き来る風や綱手ならら (二二)

さまざまの花貝寄せたるに

d、枝ながらうづまき波も折らねばやちりぢり寄するよるの花貝 (二七)

錦の浦に色々の貝寄せたり

e、こきまぜに色を尽くしてよる貝は錦の浦と見ゆるなりけり (二九)

名もなき貝ども多く寄する所に

f、よろづよを朝夕かぬるしめの内は四方の貝をも集めつるか

な

(四〇)

右のaとdは「波」によって打ち寄せられる貝の様子が、「藤」や「花」に喩えられ、bとcはともに「風」によって貝が浜に寄せられたとする歌である。cでは「漕ぐ人」もいないのに舟が渚に到着したことによそえて「舟貝」が浜に寄せられていることを表している。そしてeに見られるように、数々の貝が「色を尽くしてよる」美しさが「錦」に見えるのだと賛美されている。多くの貝が採取できる伊勢の海の豊かさが、あたかも自然の庇護によっているかのような捉え方であり、その結果としてf「四方の貝をも集めつるか」のように、世の中すべての貝が斎宮のもとに集まったのだとされている。

自然の恵みの豊かさは、その御代の政が成功していることの証である。斎宮が伊勢の地から中央の帝の御代を支える立場である点を見ると、豊かな恵みを和歌に詠むことには、内親王の斎宮としての働きを称える意味が込められていると考えられることもできるように思う。色とりどりの貝が数多集められ、届けられた。それは、斎宮良子内親王に向けてのエールだったとも言えよう。

さて、この貝合日記における貝の詠みぶりの特長を述べて来た。人知を超えた力で多くの貝が寄せられるような詠みぶりがいくつも見られたが、捉えられ方としては「拾う」とされる歌も七首みられた。以下に示す。

二見の浦

g、唐錦波のかげこそ打ち寄せて今日やふたみの貝をひろはむ

大淀

h、大淀によもの浦貝拾ひても千尋ばかりの菖蒲をぞ引く

(四)

浦人ごとに貝拾ひたり

i、浦わかず八十の島人うちむれてひと所にも拾ふ貝かな

(八)

都貝

j、ともすれば恋しきかたの名におつる都貝をぞまづ拾ひつる

(一〇)

右歌

k、神代より言ひはじめける長浜のいける貝をば君や拾はん

(一二)

大淀の浜に人のゐたる

l、いかにせん今日大淀の浜に来て菖蒲や引かむ貝や拾はん

(二二)

志賀浜にて都貝拾ふ

m、見し人の恋しきことに都貝あさるとこしが浜までぞ行く

(二四)

まず、貝合が行われた五月五日の節会を踏まえた和歌としては h と i がある。ともに「大淀」を背景とし、「淀」とのつながりでは「菖蒲引き」を詠み込んでいる。g「今日やふたみの貝を拾はむ」からは、特別な日だという意識を見ることができ、i「菖蒲や引かむ貝や拾はむ」からは、節会で重用される「菖蒲」に匹敵す

る大切なものとして「貝」が拾われるさまが語られているといえよう。

また j と m には「都貝」が「恋しい」ものとして登場する。「都貝」について日本古典文学大系頭注は「不明。ホラガイの仲間にミヤコボラ」があるとしている。¹¹⁾「都貝」が和歌に詠まれたのは、管見ではこの「斎宮良子内親王貝合日記」のみであった。¹²⁾実際に棲息していた貝というよりは、「都」を冠している点が重要だろう。「都貝」を「拾う」とすることによって、都から物理的に離れた環境ではあるが、都文化との精神的なつながりは絶えていないことが語られているのである。

i では「八十の島人」が「ひとところ」で貝を拾ったとしている。ここには、今回集められた美しい貝々は、国のすべての人々の心が結集したものであることが語られている。そして k では「神代より」の表現によつて悠久の時の積み重なりが示され、その時間の堆積の結果としてもたらされたのが「いける貝／生き甲斐」であるとしている。その貝を「君や拾はん」とすることによって、斎宮良子内親王を寿いでいるのである。

さて、ここまで「貝／かひ」がどのようなものとして詠まれているかを考察してきた。色鮮やかな貝々は、「寄せられ、吹かれ」集まってきたとされ、それらを「拾ふ」ことが繰り返し詠まれている。こうした詠みぶりからは、斎宮良子内親王が人知を超えて土地の風物に受け入れられたのみならず、土地の人々全てが斎宮を支えていることが語られていると考えられる。斎宮を取り巻く全ての事物を良子内親王のサポーターとする趣向である。

また、右には「拾ふ」主体として、「浦人／八十の島人／大淀の

浜の人」が登場したが、この作品には冒頭から繰り返し「人々」への言及がある。そのことにはどのような意味を読み取ることができるのだろうか。考察を続ける。

四、寿ぎの表現(三)——「人々」へのまなざし——

さて、先ほど和歌において「貝を拾う人々」が描かれると述べたが、「貝／かひ」が「拾ふ」ものである点は、当然のことながら一般的なものであるといえる。『中務集』には次のようにある。

前斎宮の五十賀の御屏風、はまにかひひろふ

あさりする浦ものどかに波たてて今日はかひある心地こそすれ
(一〇)

「前斎宮」は宇多天皇皇女柔子内親王であるとされている。¹³⁾中務は柔子の姪にあたる。「はまにかひひろふ」という屏風に寄せた和歌である。浜の「貝を拾う」ことが「貝ある／甲斐ある」を導き、五十賀の祝いとしてふさわしい寿ぎになっている。

いうまでもなく「貝」が「海浜」に生息するものである以上、それを「拾ふ」とすることに特段の珍しさは認められない。注目したいのは、『斎宮良子内親王貝合日記』においては、冒頭に描かれる人々が現実の浦や浜に出て貝を拾っている点である。『中務集』の「貝拾い」は屏風の中の世界に留められるが、この貝合日記では現実世界にリンクするものとして人々の存在がある。

繰り返し引用になるが、日記冒頭部から該当箇所を抜き出して示すと次のよう描かれていた。

春のつれづれは京にてだに海人のしわざゆかしがりし人々なれば、浦々に出てて貝を拾ひつつ持て参り集まる／さすがに我も劣らじと浦々に漁りをし、男女老いたる若き出でて数を選びまさむと挑みかはし

日記冒頭には斎宮に仕える「海人のしわざゆかしがりし人々」や「男女老いたる若き」は「浦々に出てて貝を拾い」「浦々に漁りをし」というように、貝合のために海に出て貝を集めていると記されている。重要なのは、そうした人々の様子が貝合に献上された「州浜」の意匠や和歌に反映されている点である。冒頭部分と同じく、州浜を説明した日記部分から該当箇所を抜き出して示す。

左／いま一つもかねの同じ海二見の浦しろらの浜に舟人行きちがひたるをおろし／一つは参らせたる州浜の内に、山のあなたうらは小浜に波の荒く寄りたり、こなたうらには人々多く群れて貝を手ごとに拾ひたり。

右／浦々磯々の潜きし網引き楫人舟人行きちがひたる、同じさまなれば、詳しく書かず、その心同じう見えぬべし。

左方には「舟人行きちがひたる」、「人々多くむれて貝を手ごとに拾ひたり」とあり、右方にも「浦々磯々の潜きし網引き楫人舟人行きちがひたる」とある。ここには浜辺で貝を拾う人々や、舟を出して漁をする海人が描かれている。留意すべきは、その人々の姿が日記冒頭で示された貝を拾う人々との連続の景である点だ。意匠の凝らし方としては、美麗な貝だけを飾る方法もあったは

ずだが、そうではなく、貝を集める作業に携わった人々までもを州浜に象っているのである。和歌に「貝を拾う」と詠まれるものが見られることを先に述べたが、その点についても、日記冒頭で人々が貝を集めに浦々に出て行ったこととつながりにおいて理解すべきであろうと思う。一首だけ示しておく。

浦人ごとに貝拾ひたり

浦わかず八十の島人うちむれてひと所にも拾ふ貝かな(一〇)

繰り返しになるが、右の和歌は海辺のいたるところで人々が貝を拾っているとしており、全ての人々の力が斎宮の貝合へと結集されていくさまがうたわれている。ここで「貝拾ひたり」とされる人々の姿は、数多の州浜の上にミニチュアの浜辺として造形されていると考えられるが、指摘したいのは、その和歌も州浜も、実際に良子内親王のために浜に出て貝を収集した人々が再現されたものであるという点である。

即ち、斎宮良子内親王貝合に用意された州浜は、斎宮を取り囲む海浜の景色のみならず、そこで生きる人々までもを抱え込んだ点において、ドールハウスのような特別な贈り物だったのである。州浜に象られて、斎宮周辺の伊勢の海が次々と届けられた。そこには海からの豊かな恵みが飾り付けられていたわけだが、単に海産物のみだけでなく、貝を拾う人々を取り入れることによって、人々が斎宮良子内親王を守り支えているのだというメッセージを読み取ることができるように思う。

四、まとめ

十一、二歳の姫君に向けて、心を尽くして行われた行事がこの貝合である。瑞祥の神仙世界になぞらえたり、姫君のためにあらゆる貝が伊勢の浜辺に集まったのだとしたり、現実世界でお仕えしている人々を、州浜の上に登場させたりしている。そこには、単に地名や歌枕を羅列しているのではない、人々の思いが手作り感満載の楽しい演出でプレゼントされているのだと思う。「ドールハウス」とした所以である。

当日は都での歌合のように、左右の衣をお揃いの色でまとめ、良子内親王自身も「二藍の御単がさねに紅のすずしの御袴」を身に纏い、季節に応じたお洒落をしている。貝は海からの恵みである。その恵みが豊かであること、土地の人々が愛情深く携わっていることを遊びを通して学ぶ機会としても重要な行事であったのではないだろうか。

※本稿は二〇二一年度三重大学研究ユニット「斎宮文化研究ユニット」の成果の一部である。

福長進先生に出会って三十年以上たちます。「研究者は嘘をつかないことが仕事になる。いい生き方だ。」という先生のお言葉に感動して、研究者を志しました。生きざままで導いて下さることに感謝しています。

注

(一) 萩谷朴「廿卷本『類聚歌合卷』の研究」(『短歌研究』、改造社、一九三九年二月、三〇七頁)。本作品の理解については『平安朝歌

合大成 増補新訂』（同朋舎出版、一九九五―一九九六年）を参照した。

- (2) 堀部正二『纂輯類聚歌合とその研究』（大学堂書店、一九六七年、一七五頁）。

- (3) 久徳高文「斎宮の文学」その三』（『椋山女学園大学研究論集』第一〇号第二部、一九七九年三月、八頁）。

- (4) 本橋裕美「文学サロンとしての斎宮空間——良子内親王を中心に——」（『斎宮の文学史』、翰林書房、二〇一六年、一二三頁）。

- (5) 『斎宮良子内親王貝合日記』の本文は日本古典文学大系『歌合集』岩波書店、一九六五年、和歌は新編国歌大観による。『うつほ物語』の本文は新編日本古典文学全集により、巻名、頁数等を示した。私に一部表記を改めた箇所がある。和歌の検索には「日本文学Web図書館」「和歌データベース」（古典ライブラリー、二〇一五年一月）を用いた。

- (6) 州浜と神仙世界の関係については、稲城信子「造物の系譜——州浜・山形・標山など——」（『元興寺文化財研究所年報』、一九七七・一九七八）に指摘がある。また相馬知奈「州浜」考——庭園文化の影響——」（『日本文学』、第五六巻第四号、二〇〇七年四月）に多くを学んだ。

- (7) 後続の和歌との関わりはまだ今後検討しなければならないが、十二番歌は「舟貝」として「漕ぐ人もなぎさに寄する舟貝は吹き来る風や網でなるらん」とし、舟が陸に辿り着いたとしている。

- (8) 萩谷朴『平安朝歌合大成』による。同様の指摘は、注3久徳高文論文でもなされている。

- (9) 貝について「よる」は三番、二九番、三一一番の三首、「よす（うちよす）」は五番、二七番の二首、「ふきくる」は二一番、「あつめつる」は四〇番の各一首ずつ確認できた。

- (10) 「淀」に「菖蒲」が根付くものであることは、しばしば和歌に見ることができ。「さみだれちかくなるらしど河のあやめの草もみくさおひにけり、馬内侍集、よみ人しらず、一〇八」など。

- (11) 萩谷朴校注『歌合集』（日本古典文学大系、岩波書店、一九六五年、一六二頁）。

- (12) 「みやこ貝」一例、「みやこがひ」三例の計四例だが、十六番歌は「夫木抄」一三〇九七番、二十九番歌は『歌枕名寄』四八五四番として採られているため、用例としては当該の二例のみとなる。

- (13) 稲賀敬二『女流歌人中務——歌で伝記を辿る——』（新典社選書25、二〇〇九年、三一―三二頁）。

- (14) 日記部分末尾には「貝して鶴亀魚人まで作り集めたる」とあり、貝がらで魚や人物まで造型していたことがわかる。

- (15) 榎村寛之氏は「紫の上のような風情」と指摘しておられる。（『斎宮——伊勢斎王たちの生きた古代史』、中公新書、二〇一七年、九六頁）。

（かめだ ゆか／三重大学特任准教授）